

坊ちゃん

夏目漱石

主人公は東京の物理学校を卒業したばかりの江戸っ子気質で血気盛んで無鉄砲な新任教師である。漱石が高等師範学校英語嘱託となって赴任を命ぜられ、愛媛県尋常中学校で一八九五年（明治二八年）四月から教鞭をとり、一八九六年（明治二九年）四月に熊本の第五高等学校へ赴任するまでの体験を下敷きに、後年書いた小説である。人物描写が滑稽で、わんぱく坊主のいたずらあり、悪口雑言あり、暴力沙汰あり、痴情のもつれあり、義理人情ありと、他の漱石作品と比べて大衆的であり、漱石の小説の中で最も多くの人に愛読されている作品である。親譲りの無鉄砲で子供の頃から損ばかりしている坊っちゃん、父親と死別後、親の残した遺産のうち兄から渡された六〇〇円（兄は同時に清という名の下女に与えるようにと五〇円を渡した）を学費に東京の物理学校に入学。卒業後八日目、母校の校長の誘いに「行きますしようと即席に返事をした」ことから四国の旧制中学校に数学の教師（月給四〇円）として赴任した。